

日本再発見塾 in 飯館 2008 11/8~9

いいたてまでい交遊塾

「いいたてまでい交遊塾」がいちばん館をメイン会場に開催され、村内外からスタッフを含めて130人が参加しました。村のまでいな暮らしを「もったいない」「心をこめて」「食のモノサシ」の3つの観点から体験し、講師や村外の実践者との交流を深めることで、自分達の「までい」を掘り起こし、深めました。



開講式

開講式はいちばん館で行われ、までいライフ推進事業実行委員会の齋藤政行会長が、「自分が小さな頃当たり前だった生活が、今では豊かなものであると考えられています。この機会に、までいについてじっくり考えてみましょう」とあいさつ。続いて菅野村長が、「改めて村の、までい」の心を再発見していただき、今後に役立てていただければ幸いです」と歓迎の言葉を述べました。



▲開講式であいさつする齋藤会長

第1部 間かせっかい私のまでい

次世代塾参加者有志が企画・運営を行い、村の概要やまでい交遊塾の実施に併せて募集した「私のまでい」を紹介。

小学生から88歳の村民の約170名の応募の中から、「これは！」と思うまでいの実践をそれぞれ映像で紹介しました。



▲小学生が語る「私のまでい」



▲「までいの木」(製作:次世代塾有志) ▲次世代塾有志 菅野慶一氏

主催:までいライフ推進事業実行委員会/飯館村
 後援:福島県
 協力:日本再発見塾
 運営協力:いいたてまでいな村づくり応援スタッフ/次世代塾参加者有志/日本再発見塾学生実行委員会/福島大学生有志
 調理協力:伊丹沢婦人会/小宮行政区/上飯桶行政区/イータテベイクじゃがいも研究会/氣まぐれ茶屋ちえこ/加工グループわらび/鮎川邦夫/愚真会/宿泊体験館きこり/村学校給食センター ほかの皆様
 ※この事業は、「福島県電源地域振興・原子力等立地地域振興支援事業」の助成を受けて実施しました。

◆講師



野口 智子さん
ゆとり研究所所長

ゆとり・スローライフにこだわりながら、住民参加による商店街の活性化や新時代の観光開発に取り組まれている



梅原 真さん
デザイナー

農業・林業・漁業関係の商品パッケージデザインを多く手がけ、地域が地域として生きる生き方を模索されている



竹田 純一さん
里地ネットワーク事務局長

環境と共生の地域づくりプロデューサーで、集落における地域資源の見直し作業や佐渡のトキにも関わられている

第2部

「もったいない」「心をこめて」「食のモノサシ」の3つのテーマで、村内6カ所に出て、村外の参加者や講師とともに、村の“までい”なものや取り組みを再発見しました。

までい村たんけん

もったいない第1班 (上飯桶)



案内人・佐藤ちよ子さん、赤石沢守さんほか

▲竹ぼうき作りを見学する参加者

もったいない第2班 (飯桶久保)



案内人・只野俊さん

▲炭焼きや山仕事を語る只野俊さん

心をこめて第1班 (小宮)



案内人・斉藤和子さん、小林年雄さん、三角常雄さん

▲「までいは楽しい!」と語りあう1ターンの皆さん

心をこめて第2班 (伊丹沢)



案内人・庄司金男さん、佐藤絹枝さん、山田一雄さん、庄司米子さん、佐藤ロクさん

▲長ねぎの育て方を説明する庄司金男さん

食のモノサシ第1班 (前田)



案内人・浦住正喜さん、佐藤貞勝さん

▲前田加工所でつきたてのもちを試食

食のモノサシ第2班 (宮内)



案内人・菅野昌基さん、渡辺とみ子さん

▲「までいじいさん」こと菅野昌基さんから野菜づくりの話を知る参加者

夕食会&交流会

地産地消の郷土調理を味わいながら交流を深めました。いいたてまでいな村づくり応援スタッフの増子良一さんから、までいライブ応援歌「までいライブ」の歌のプレゼンテーションがありました。



▲までいライブ「いいたてを歌う増子良一さん(右)とMIDOIIさん(左)」



▲いいたての郷土料理、いいたての鍋、煮物、ジャガイモのみそいびりなど、「までい」な郷土料理で交流

村外実践者の発表



▲ザ・ピープル代表 吉田恵美子さん

いわき市のザ・ピープル代表の吉田恵美子さんからは、古着のリサイクルから始まり、活動を通して見えたゴミや環境問題、世界の貧困の問題、障がい福祉などに活動の幅を広げていった実践をお聞きしました。

西会津町健康ミネラル野菜普及会会長の宇多川洋さんからは、息子さんを病気で亡くされたことをきっかけに健康ミネラル野菜に取り組んだという実践発表がありました。



▲西会津町健康ミネラル野菜普及会の宇多川洋さん(右)と清野スミさん

第3部 いいたての活かし方

「きこり」を会場に、講師や村外実践者を囲み、どぶろくを酌み交わしながら交流を深めました。また、一日をふり返り、出会ったり、感じたりした「までい」を報告し合い、その大切さや有効性を語りながら、までいの活かし方を考えました。



▲までいについて熱く語り合う参加者ら

第4部 までいの可能性を探る

「までいは地球を冷ます！」生活、地域づくり、仕事づくりの3つの観点から「までい」の活かし方とこれからの可能性について、講師を中心にシンポジウムを行いました。参加者からも数多くの発言があり、活発な議論が展開されました。



▲までいの可能性を探るシンポジウム

開されました。「シンポジウムより一部抜粋」
コーディネーター 松野光伸氏
(実行委員、福島大学教授、村応援スタッフ)
「までいの可能性を探る」をテーマにお話しを伺いたい。まずは暮らし方という視点からお願いします。
野口智子氏

スローライフの「スロー」の反対は「ファスト」。ファストは、早く、大量生産、画一的であるのに対して、スローは、手間を掛けて、少量、多様性が特徴です。飯館村には、作る技術、素材を使う技術、保存の仕方、食べ方などがまだ残っていると思います。今、世の中の軸足がスローに動いてきていますが、スローだけで生きてい

カツオの一本釣りは、豊かな姿。これが高知から無くなるのが嫌だと思「漁師が釣って漁師が焼いた」というキャッチ



▲映像を交えて語る梅原氏

くのは大変。ファストはとでも効率的で便利です。生活の中では状況に応じて両方を使いこなし豊かに暮らしています。でも、までいやスローライフは意識して言い続けたいとファストに流されてしまふと思えます。

梅原 真氏
私は、土佐生まれで、大阪へ父の転勤で引っ越したが、大学卒業後、土佐が好きで地元に戻りました。

コピーの商品を心をこめてデザインしました。釣ったカツオを一本一本さばいて、ワラで手焼きするとても「までい」な作り方。ギフト用に作ったものが売れて、6年間で売り上げ二十億円となり、漁師3人の生活が守れました。今、カツオの一本釣りは、資源や環境を守る漁法として世界基準に認定される予定で、今後世界流通の商品となっていくと思えます。

竹田純一氏
里山では色々なものが循環し、人間の暮らしの営みが自然風景をつくり、そこで生き物(木、水、土)が循環しています。そこには智恵や生活文化の厚みがあり、外から来た人はびびります。集落にはその人たちが引き継いできたものがあるかも知れない。そんな智恵や技がとも愛おしいと感じます。

暮らしをつくる自然や

生産はつながっています。それを楽しんでる側面が大切。しかし、飯館村を探検して、「楽しんでいないんじゃないかな」と感じました。楽しんでいるとデザインできると思っています。



▲までい村たんけんの感想を語る竹田氏

までいへのメッセージ

野口氏 ①じめに、②きることを、③まからやっていきましよう。

竹田氏 飯館村は、まじめすぎます。ふざけたことをやる日があっても良い。行政区単位でなくても、やりたい、やれる人がやっていけば良いので



▲参加者からも多くの発言がありました

昼食&閉講式

愚真会の手打ちの新そばを味わいました。その後、閉会式が行なわれ、参加者は2日間の「までい交遊塾を通して、自分の「までい」を振り返り、心に感じていました。



▲「手打ちのおそばはおいしいな」



▲閉講式の様子「また来年お会いしましょう」